

マーガレット・アトウッドの『マッドアダム』シリーズにおける人間の良心のメタファーとしての動物

張 可瑩

初めに

マーガレット・アトウッドは現代カナダの小説家、詩人、評論家であり、作品のテーマはフェミニズム、ジェンダー平等、アイデンティティの構築から、自然と共生、人間と非人間(AI 人工知能、動物、自然)の関係、人的と自然の災害、ウィルス爆発まで幅広い。これらは、2015年国連サミットで採択されたSDGsの目標の5(ジェンダー平等を実現しよう)、13(気候変動に具体的な対策を)、14(海の豊かさを守ろう)、15(陸の豊かさを守ろう)としっかり繋がっていると考えられる。先見的な眼差しで文学世界を創造するアトウッドは、私たちの注意を現代の喫緊の問題に向けてるように努力していると思われる。

『マッドアダム』シリーズは、『オリクスとクレイク』(2003年)、『洪水の年』(2009年)、『マッドアダム』(2013年)の三部から成り、21世紀の現代文学において画期的な作品である。三部作では世界が終わる前の生存、終わった後生き残るために共存する物語が描かれる。特に遺伝子組換え技術とその影響に焦点を当て、過度に発達する科学技術、動物、自然環境と人間の関係が深く探究される。動物は単なる生物以上の存在として描かれ、人間の倫理や自然環境への影響を象徴する役割を果たしている。本研究では、エコクリティシズム、動物倫理、ポストヒューマンニズムの視点から、アトウッドの作品における動物の表象がどのように人間の倫理と環境への影響を反映しているかを考察する。

研究背景

アトウッド自身は、自分が書いた小説をSF小説と認めたがらない傾向にある。『マッドアダム』シリーズを例にとると、彼女は自分の作品を「思弁小説」と呼んでいる(“Margaret Atwood On Science Fiction”)。つまり、シリーズで登場する遺伝子組換え技術は、既存の科学研究に基づいた推測に基づいている。言い換えれば、小説に描かれている恐ろしいシナリオはすべて起こり得るということである。本シリーズは、自然環境が日々悪化する未来を警告すると同時に、人間がどのように自己を見つめ直し、動物との関係をどのように扱うべきかについての根本的な問いを立てる。

近年、日本において、アトウッドの作品の探求は進んできているが、基本的にはフェミニズムとジェンダーに関する研究である。松田雅子は「マーガレット・アトウッドのグローバル・ヴィジョン-サバイバル・地球環境・未来」(2016)で、アトウッドの作品はカナダ文学の文化的自立から、遺伝子技術や環境問題などの現代文明が直面するグローバルな課題に至るまでの広範なテーマを探究し、人類のサバイバルに対する重要な視点を提供していると結論する。佐藤アヤ子は「カナダ文学にみる環境テーマ-M.アトウッドが希求する(新ディストピア小説)」(2016)で、アトウッドの作品は環境破壊や遺伝子技術の危機に対する警鐘を鳴らし、新たな希望を示す「新ディストピア小説」として、従来のディストピア文学とは異なるアプローチで読者に強いメッセージを伝えていると述べる。Mohit Sharma と Tanu Gupta は「Mapping Cause Analytics of Post- Apocalyptic Literature with SDGs: A Systematic Literature Review」(2022)で、アトウッドの小説はSDGsに関連する現代社会の懸念を反映し、戦争や環境破壊などが引き起こす破滅の危機を強調することで、読者に対してその重要性を認識させる役割を果たしていると言う。自然環境と動物に関するアトウッドの研究論文はゼロではないが、数は少ないという現状である。

1. 動物倫理及び人間性の鏡

動物倫理思想は、20世紀の1960年代と1970年代に興り、人類が自然界および非人間の生命に対する見直しと評価を反映した重要な社会文化現象である。オーストラリアの学者ピーター・シンガーによる『動物の解放』は、「感覚機能」を生命の利益に関する判断基準として採用し、動物の苦痛を減少させることの重要性を強調している。シンガーは、動物の苦しみに対する認識を革新的に高めたが、動物の権利の認識と保護には限界があると述べる。フランスの哲学者アルベルト・シュワイツァーの『生命への畏敬』は、すべての生命に対する尊重と愛をより広い視点から呼びかける。異文化的視点からの動物批判研究は、フェミニズムおよびポストコロニアル批判と組み合わせることで、動物の権利と人間中心主義の問題に対する議論を深める。アメリカの学者キャロル・J・アダムスの『肉食という性の政治学』は、フェミニズムおよびポストコロニアル批判の視点から、動物の権利と人間

社会との関係を探求し、動物と人間の権利が平等に実現される社会を提案する。

『洪水の年』で、「私たちが持っている様々な信念と考えが、他の生物にとっては本能となる」(Atwood 601)と述べ、人間社会の障壁を批判し、自然へ、動物の本能への回帰を提唱する。

For what in us is belief and faith, in the other Creatures is inborn knowledge. No Human can truly know the full mind of God. (Atwood 601)

アトウッドは、人間だけが信念を持つという思い込みを批判する。彼女は直接描写と間接描写を用いて、動物倫理を広範囲に展開する。一方、動物が実験対象として経験する苦痛を描写し、制御不能な肉食行動、ゲーム中の動物イメージ、性行為を通じて動物性を示すなど、人間と動物の衝突と矛盾を作品の隅々にわたって描写する。読者が読み進める中で感じるの、様々なレベルからの潜在的な規範である。『洪水の年』で何度も強調されるのは、神がノアに与えた動物を守る使命であり、これが「神の庭師」の行動原理となることである。その動物倫理観は、作品でよく出る重要な人物「アダム第一」の一言によって要約される。

“Our role in respect to the Creatures is to bear witness,” said Adam One. “And to guard the memories and the genomes of the departed. You can’t fight blood with blood. I thought we’d agreed on that.” (Atwood 620)

2. 自然環境破壊の証人としての動物

三部作では、科学者たちは特定の目的のために遺伝子組換え技術を使って様々な生物を作り出している。例えば、「ラカंक」(Rakunk)はラクーンの顔とスカंकの尾を持ち、人間にとって良いペットになることを目指している。「光るウサギ」(Glowing rabbits)は、深海のクラゲの発光遺伝子を追加し、ウサギ全体を半透明にすることで美的感覚に合うように作られている。「ウォルフヴォグ」(Wolvogs)は犬の従順な外見と狼の凶暴な行動を兼ね備えている。「スナット」(Snat)は、マウスの体と蛇の鱗の尾を持ち、蛇の鋭い毒牙も持っている。「リオバム」(Liobam)は、見た目は羊で、声は羊と獅子の吼え声の混合である。遺伝子組換え技術の発展は、自然環境を破壊しないという原則に従うべきが、現状では生物の肉体や精神、種の完全性を損ねている。ピーター・シンガーは、感じるができるあらゆる生命体の利益を平等に考慮するという原則を強調する。動物の利益や福祉を軽視したり犠牲にしてはならないと確認し、医学研究のニーズと動物の福祉を尊重するバランスが求められる。

最も恐ろしいのは、三部作に登場する会社が鶏の肉の生産量を増やすために鶏の遺伝子を改変し、目もくちばしもない大きな肉の塊に改造していることである。2024年2月には、明治大学が異種器官移植用の豚を開発し、日本国内の医療機関にクローン豚を供給することを発表した。研究者たちは2025年までに人間に豚の腎臓を移植することを目指している。このケースでは、豚の腎臓や心臓を移植することは医療や科学の進歩で多くの人の命を救う可能性があるが、動物の福祉も慎重に考慮する必要があると思われる。本シリーズの「ピグーン」(Pigoons)は、人間に移植器官を提供し、生物会社は供給速度を高めるために遺伝子を追加するものである。アトウッドは、遺伝子組換え技術が生物の肉体の完全性を損ねる可能性があるとして批判する。

エコロジストのグレッグ・ギャラードは、エコクリティシズムが文学や文化作品が人と自然の関係をどのように反映し、人間が環境に対してどのような態度をとるかを明らかにしなければならないと強調する。三部作を通じて動物が経験する描写は、人間の活動が自然環境に与える破壊をリアルに反映する。「構内」(Compound)は高度に発展したバイオテクノロジー企業の閉鎖的で高セキュリティな研究施設群であり、支配的な側の、倫理道徳を無視する多くの行為は、「神の庭師」というエコロジー組織の反対を招く。反対勢力は遺伝子組換え技術された動物を利用して一連の破壊活動を行い、火災や交通事故を引き起こす動物を作り出す。

アトウッドは読者に人間の自然に対する態度を反省させ、科学技術の使用に責任を持つよう呼びかけている。

3. 反省、共感、覚悟

三部作では、動物の苦しみを描写することで、動物の権利と動物解放の問題を再考する必要性を説く。『洪水の年』では、絶滅の危機にある動物の毛皮を使用した高級女性服の工房が描かれ、人々の無関心と企業の倫理道徳の欠如が描かれる。

「神の庭師」たちは、自然環境保護と動物の権利を強調し、自然との共生を目指す。食事に関して、「神の庭師」たちはベジタリアンを実践する。動物が思考を持っていると考え、洪水の後、神がノアと動物の間に契約を結ば

せる。

Therefore the Animals are not senseless matter, not mere chunks of meat. No; they have living Souls, or God could not have made a Covenant with them. (Atwood 458)

主要なキャラクター「アダム第一」は「私たちは食欲の奈落に落ちてしまった。どうして世の中の全てが自分たちのものだと思込んでしまったのか、実際には私たち自身が世界の一部であるに過ぎないのに……傲慢の罠にはまらないよう、自分が唯一無二であると錯覚しないように祈りましょう。万物を超えた存在だと自負せず、一時的な好みで生命をないがしろにし、罰から逃れられるという幻想を抱かないようにしましょう」(Atwood 421)と述べ、人間が自然界の一部であることを忘れないように警告している。「神の庭師」たちの観念はピーター・シンガーやキャロル・Jなどの動物倫理の観念と呼応しており、彼らの理論は、動物が痛みを感じる能力に基づいており、すべての感覚能力を持つ生命に公正な扱いを要求する。

終わり

『オリクスとクレイク』において、狂気の科学者クレイクは致命的な病原体を発明し、保健製品「ブリスプラス」(BlissPlus)を介して世界中に拡散させ、世界を再構築しようと試みるが、最終的には自らの滅亡を招き、人類最後の生存者である「スノーマン」ジミーが、彼によって創造された「理想的な人類」「クレイカー」たちの世話をするようになる。本作品は、科学技術の倫理と人間の道徳に深い問いかけを投げかけるとともに、特に『オリクスとクレイク』の発表当時、世界がSARSなどの伝染病の脅威に直面していたことから、人類の生存状況に対する反省を促した。『洪水の年』は、人類の悪事によって引き起こされた「水なき洪水」が地球を襲う、終末の風景を描いた作品であり、世界がどのように終わりを迎えたかを語る。最後の『マッドアダム』では、前二作の物語の主人公たちと人類の残存者たちが終末の中で生き延びる姿を描いている。これらの作品を通じて、過度に発展する遺伝子組換え技術によって根本から変化した世界を舞台に、人間と自然、科学技術と倫理の間の複雑な関係を探究している。人間の過剰消費と技術の操りによってもたらされた終末の世界では、動物は単なる生物学的存在ではなく、人間の自己中心主義に疑問を投げかけ、自然と人間の共生を探究し、精神文明の意義を再定義する媒介となる。

『マッドアダム』シリーズにおいて、動物は人間の倫理観と道徳的意識を表現するための重要な手段となる。動物の表象を通じて、人間は自然との関係に対する深い反省を促され、アトウッドは動物を通じて環境破壊、生命への軽視、技術発展の制御不能による危機を暴露し、自然界との調和的共存の必要性を強調する。

参考・引用文献

Adams, Carol J. *The Sexual Politics of Meat: A Feminist-Vegetarian Critical Theory*. Bloomsbury Academic, 2015.

Atwood, Margaret. "Margaret Atwood On Science Fiction", <https://www.wbur.org/onpoint/2011/10/12/margaret-atwood>, 2011.

-- *The Maddaddam Trilogy*. Anchor Book sISBN, 2014.

Cooke, Nathalie. *Margaret Atwood. A Biography*. ECW Press, 1998. Garrard, Greg. *Ecocriticism*. 3rd Edition. Routledge, 2023.

Sharma, Mohit. Gupta, Tanu. *Mapping Cause Analytics of Post Apocalyptic Literature with SDGs: A Systematic Literature Review*. Literature & Aesthetics, 2022.

Singer, Peter. *Animal Liberation*. Vintage Digital, 2015.

明治大学. 「異種臓器移植用ブタの国内生産に初めて成功 明治大学発ベンチャー ポル・メド・テックと米国イージェネシスのチーム」. <https://www.meiji.ac.jp/koho/press/2023/mkmht0000010sg7r.html>.

松田 雅子. 「マーガレット・アトウッドのグローバル・ヴィジョン-サバイバル・地球環境・未来-」. 科学研究費助成事業研究成果報告書, 2016.

佐藤 アヤ子. 「カナダ文学にみる環境テーマ-M.アトウッドが希求する〈新ディストピア小説〉」. 科学研究費助成事業研究成果報告書, 2016.

阿尔伯特·史怀哲, 杨 巍译. 『敬畏生命: 史怀哲自传』. 江苏凤凰文艺出版社, 2017.